

修士論文（要旨）

2016年1月

セラピストのタッチが心理状態に及ぼす影響
—理学療法士・作業療法士の徒手的介入方法の検討—

指導 山口 創 教授

心理学研究科
健康心理学専攻
214J4054
橋本 賢次郎

Master's Thesis (Abstract)
January 2016

The Effects of Therapist's Touch on Mental State: A Study of Manipulative
Intervention Methods for Physical and Occupational Therapists

Kenjiro Hashimoto

214J4054

Master's Program in Health Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

1. 背景・目的.....	1
2. 研究1 セラピストの徒手介入が気分状態に及ぼす影響.....	1
3. 研究2 セラピストの徒手介入が心身へ及ぼす影響.....	2
引用文献	

1. 背景・目的

理学療法士及び作業療法士（以下、セラピスト）の臨床では、対象者の身体機能の評価や治療を行う過程において、身体に触れ、一緒に動く非言語的な身体間コミュニケーションを伴うことがある。セラピストは対象者とのやりとりの中で、身体的・心理的特徴を多角的に捉える必要がある。一方、対象者の身体的特徴や症状はその時の気分状態によって異なり、その場の反応に応じた臨機応変さが求められ、対象者に触れることによる心理的影響もアプローチとして考慮する必要がある。これらのスキルはセラピストの暗黙知として積み重ねられており、言語化、定量化することが難しく、セラピストの徒手介介入における心身の相互作用について述べた論文は少ない。本研究では、セラピストの徒手介介入の要素の中でも心理的影響のあるタッチに焦点を絞り、対象者の心理状態との関係性を調べることで、より効果的な徒手介介入方法を検討することを目的とした。

2. 研究1 セラピストの徒手介介入が気分状態に及ぼす影響

2.1 目的

セラピストの徒手介介入が対象者とセラピストの気分状態に及ぼす影響を調べる。

2.2 対象

被験者：研究担当者の所属する病院（以下、当院）に臨床実習生として配属された養成校の学生 18 名

セラピスト：当院に所属する理学療法士 1 名

2.3 実験の流れ

- ① 事前デモンストレーション
- ② 二次元気分尺度
- ③ 座位前方リーチテスト
- ④ 徒手介介入
- ⑤ 座位前方リーチテスト（再評価）
- ⑥ 二次元気分尺度（再評価）

2.4 介入内容

学生は治療用ベッドに端座位になり、説明及びデモンストレーションを研究担当者が行った。学生自身の意識付けは特に必要ないことも説明した。セラピストは学生の後方に座り、後方から学生の胸郭に触れ、姿勢筋緊張、重心の揺れ、息遣い等を感じながら、座位前方リーチテストを実施するにあたって、より機能的な座位姿勢となることを目標に治療的な誘導を行った。実際の臨床場面では、必要に応じて声掛けをしたり、触れる場所を変えることで固有感覚情報の提供場所を変えたり、セラピスト自身の立ち位置を変えたりと、対象者に応じて様々な過程が生じる。しかし、それぞれの過程が介入結果に影響するため、今回の研究では、介入を「タッチ」に限定し、言語指示や触れる部位の変換、セラピストの立ち位置の変換等は行わないこととした。よって、介入最中のタッチの質的な変化や、その中でセラピストと学生と一緒に動くことのみを許可した。介入時間は定めず、セラピストが学生の身体にある程度の変化を感じ取ることができた時点で終了とした。

2.5 結果と考察

リーチ距離は有意に短くなった。二次元気分尺度では学生は休息のエリア、セラピストは平常心のエリアに多く分布した。学生とセラピストを被験者間要因、徒手的介绍を被験者内要因とした混合計画による二要因分散分析にて、V値（活性度）とA値（覚醒度）に交互作用がみられた。単純主効果にて学生のV値、A値は有意に低下した。クラスター分析にて学生の二次元気分尺度結果を2群に分け、座位前方リーチテストとの分散分析を行ったが、気分状態との関連はみられなかった。原因として、セラピストと学生とのやりとりにおいて目的が一致しておらず、学生の身体への志向性が受動的に働いた結果、セラピストの徒手的介绍がリラクゼーションとして作用した可能性が考えられた。各測定項目の相関分析では、有意な相関係数を示した組み合わせを時系列で解釈すると、学生からセラピストへの影響よりも、セラピストから学生への影響と思われる相関が多くみられた。双方の気分状態においてその指向性は同等ではなく、関わり方によって変化する可能性が示唆された。

3. 研究2 セラピストの徒手的介绍が心身へ及ぼす影響

3.1 目的

セラピストの徒手的介绍が対象者とセラピストの心身に及ぼす影響を調べる。

3.2 実験の流れ

- ① 事前デモンストレーション
- ② 二次元気分尺度
- ③ マッサージにおけるリラクゼーション評価尺度(以下、リラクゼーション評価尺度)
- ④ 心理的距離感 (VAS)
- ⑤ 二点弁別閾検査
- ⑥ 座位前方リーチテスト
- ⑦ 徒手的介绍
- ⑧ 座位前方リーチテスト (再評価)
- ⑨ 二次元気分尺度 (再評価)
- ⑩ リラクゼーション評価尺度 (再評価)
- ⑪ 心理的距離感 (再評価)
- ⑫ 二点弁別閾検査 (再評価)

3.3 介入内容

研究1からの変更点；

学生の身体への志向性が受動的となり、徒手的介绍がリラクゼーションとして作用することを避けるため、介入中のセラピストと学生との会話を自由とした。

3.4 結果と考察

S値とA値に交互作用がみられ、単純主効果にて学生のA値は有意に低下し、S値（安定度）は有意に増加した。学生のリラクゼーション評価尺度ではすべての因子で有意に得点が増加し、徒手的介绍がリラクゼーションとして作用したことが示唆された。心理的距離感と座位前方リーチは有意に短くなった。二点弁別閾は有意差なく、正規性が確認できなかった。相関分析では、学生、セラピストそれぞれのP値（快適度）とリラクゼーション

ン評価尺度の身体的快感と不快感の因子に相関がみられた。また、座位前方リーチテスト、心理的距離感、二点弁別閾それぞれにおいて、セラピストのS値やP値、身体的快感・不快感と相関がみられた。今回の介入において学生に影響を与えたセラピストの心理的要素を最も反映している結果と解釈できた。考察として、対象者の志向性が能動的に作用するためには、タッチによる心理的・身体的作用による“気づき“が必要であり、文脈があり途切れることのない固有感覚情報の入力が必要であったと考えた。また、介入の目的を共有することで、能動的な身体へのインタラクティブな関わりが可能になるのではと考えた。

引用文献

- 天貝由美子. (1996). 中・高校生における心理的距離と信頼感の関係. *カウンセリング研究*, 130-134.
- 尼崎光洋, 清水安夫. (2006). マッサージにおけるリラクゼーション評価尺度の開発. *日本保健医療行動科学会年報*, 235-244.
- 岩村吉晃. (2000). タッチの生理学. *理学療法*, 893-900.
- 鯨岡俊. (2003). 感性的コミュニケーションと身体. *舞踊學*, 29-32.
- 近藤浩子, 小宮浩美, 浦尾悠子. (2013). 癒し技法としてのタッチの受け者と施行者における効果に関する研究. *東京医療保健大学紀要*, 1-7.
- 今野義孝. (1995). 身体の緊張-弛緩の体験と対人知覚 - 質問紙法とパーソナル・スペースの測定を通して -. *行動療法研究*, 6-14.
- 今野義孝. (1999). 発達心理臨床におけるタッチの意義. *文教大学教育学部紀要*, 37-47.
- 坂入洋右, 徳田英次, 川原正人, 谷木龍男, 征矢英昭. (2003). 心理的覚醒度・快適度を測定する二次元気分尺度の開発. *筑波大学体育科学系紀要*, 27-36.
- 塩瀬隆之, 川上浩司, 片井修. (2008). 言葉にならない技の伝承のための生態心理学. *脳科学とリハビリテーション*, 7-13.
- 高田みなみ, 長江美代子. (2012). 非接触文化である日本の看護臨床場面においてタッチングが有効に働く要因: 統合的文献研究. *日本赤十字豊田看護大学紀要*, 121-131.
- 竹中弘行. (2008). 動作練習の基本. *PT ジャーナル*, 411-420.
- 田崎智佳子, 山中寛. (2004). リラクゼーション中の主体の活動が心理・生理的效果に及ぼす影響に関する研究. *ストレスマネジメント研究*, 47-53.
- 玉地雅浩. (2005). 共振する身体 - 脳卒中後遺症の人に対する動作指導時の非言語的指示について考える -. *医療・生命と倫理・社会*, 103-114.
- 富田昌夫. (2010). 理学療法士の臨床能力をいかに高めるか-臨床理学療法士育成のための臨床理学療法士からの提言-. *理学療法学*, 540-541.
- 山口光圀, 春木豊. (2014). セラピストの動きの基本-運動器リハビリテーション新時代-.
山口創. (2010). 身体接触が不安に及ぼす影響-触覚抵抗との関連-. *桜美林論考. 心理・教育学研究*, 123-132.
- 山口創. (2012). 手の治癒力.
- 中山孝. (2004). 評価に始まり, 評価に終わる. 著: 丸山仁司, 評価から治療手技の選択-考える理学療法- (ページ: 28-37).
- 松本琢磨, 松田哲也, 玉垣努, 竹中弘行. (2004). 臨床動作分析とその適応. *OT ジャーナル*, 977-984.
- 理学療法士及び作業療法士法. (2015年12月30日). 参照先: 電子政府の総合窓口 e-Gov: <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S40/S40HO137.html>
- 渡部潤一, 白石麻貴, 田内秀樹, 鴻上繁. (2011). 座位姿勢の変化が前方リーチ距離と立ち上がり後の立位バランスに及ぼす影響. *理学療法科学*, 743-746.